



元気っ子

No.296 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

令和4年度がスタート致しました。今年度もどうぞよろしくお願い致します。

現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、保護者の方の保育室への入室をお断りしており、新年度の室内環境についてご覧頂けていないことを申し訳なく思っております。今月の澤井のコラムが室内環境についてのお話となっておりますので、少しでもお伝え出来たらと思います。そちらも是非お読み下さい。

その各保育室に「見守る保育の三省」という言葉が書かれている写真立てが置いてあります。昨年から置かせて頂いていますので、ご覧になられた方もいらっしゃるかと思いますが、今回はそのお話です。「三省」という言葉ですが、これは明治時代の実業家、渋沢栄一が座右の銘としていた「吾日に吾身を三省す」からきています。この言葉は「私は毎日、自分の行いについて何回となく反省している」という意味なのですが、保育の現場においても、この「三省す」というのはとても大切にしなければならぬと思っています。

「見守る保育の三省」の最初には「子どもの存在を丸ごと信じただろうか」という問いが書かれています。そしてこの言葉の説明に「子ども自ら育とうとする力を持っていることを信じ、子どもといえども立派な人格をもった存在として受け入れることによって、見守ることができるのである」とあります。保育園では子どもたちに様々な場面で、自分のやりたいことを選択できる環境を用意しています。この選択ですが、子どもは自分の都合の良いように選択をすることもあります。自分に必要な（発達するための）経験を自ら選択する力がある」ということを信じるのが重要であり、忘れてはいけないことです。子どもは自ら学び育とうとする力があり、その子どもの育とうとする力と必要な経験が積める環境とが合わさって子どもの生活は出来上がっていきます。これは0歳の赤ちゃんにでも当てはまることです。例えば赤ちゃんの前にくるくるチャイムとテレビゲームを置いておいたとします。赤ちゃんは間違いなくくるくるチャイムで遊び始めます。これが「自分が発達するために必要な経験を自ら選択する力を持っている」ということです。保育園で子どもに選択をする機会を設けているのは、そういう理由です。子どもが選んでいるその選択には、子どもなりの思いや葛藤があるはずで、それを大人がコントロールするのではなく、子ども自身にさせてあげることが、選択の幅や深みを持たせること、言葉では難しいのですが、「考える力、自己認知、自己の確立」へと繋がっているのだと思います。子どもたちを信じて、子ども自身にさせてあげていくこと、これが「子どもの存在を丸ごと信じただろうか」の問いへと繋がっているのです。

子どもをありのままに愛して関わっていくこと、何でもよいではなく、ねらいをもって構成された環境、その環境とは物だけでなく、社会や大人の関わり方や選択の仕方、これらがとても大切だと言えらると思います。子どもは未熟だから環境が必要なのではなく、有能だからこそ、その能力を十分に発揮できる環境を一人一人に整えること、このことをこれからも大切に、日々省みながら、守っていきたいと思います。

こんな話をいつか保護者の方と一緒に語り合っていたいなあと思います。

